

信毎俳壇

神野 紗希 選

サングラス越しに焦土の赤子泣く

(松本市) 伊藤 和夫

独裁者として命に限り竹の花

(松本市) 小林 幸平

Vaundy流し夜釣や東京湾

(小諸市) 加藤 陽介

雷雲や蓼科山を抑へ込み

(佐久市) 木内利一郎

さくらもちなつてゐたいねむのはな

(中野市) 風間 一乃

キャンプの火尽きて始まる恋話

(松川村) 岡 豊村

沈みゆく人魚の影や夏怒濤

(東御市) 渡辺美保子

告白や祭太鼓に背を押され

(長野市) 渡辺 恭子

夕虹や山の匂ひのとめとなぐ

(大桑村) 木戸口信幸

沙羅双樹せつなせつなど花散りぬ

(喬木村) 樋谷久美子

佳作

桑の実を食べて去たしアインシュタイン

(中野市) 増田きみ江

猛暑日やギプスの腕を胸に抱く

(長野市) 原山 伸子

選評

一句目、戦禍の赤子の悲劇を、干渉しない距離から見やる涼しさ。私たちはサングラスを外し、なまの眼で見つめなくてよいのか。二句目、どんな独裁者も人間だから、いつかその命は終わる。120年

に一度咲くという竹の花は、時代の変化の兆しかも。三句目、Vaundyの都会的でメロウな楽曲は、東京湾の夜釣りによく合う。四句目、山すらねじ伏せる雷雲の圧倒的迫力。大自然の躍動がひしめく。

坊城 俊樹 選

向日葵や天動説を疑はず

(飯田市) 吉沢 奨

灼けに灼け焦げむばかりや黒天守

(松本市) 小林 幸平

名山を削り名瀑とせうけり

(長野市) 白鳥 寛山

夏深し教師の語る七不思議

(小諸市) 加藤 陽介

豆腐売るとほき喇叭や夏の夕

(上田市) 竹内 重美

寶篋しばし幼の髪飾り

(佐久市) 吉岡 徹

月の石ケースの中の流れ星

(長野市) 斎藤 俊幸

梅雨明けや遠くの町の瞬きて

(大田市) 原田 勝

紫陽花のつひのうすべに人恋る

(長野市) 野原しおん

早苗葉へ父の十八番の三度笠

(埴田町) 川崎 彰典

佳作

舞姫の少女に還る祭の夜

(松本市) 中村 百仙

ひとときのぬげがらになり昼寝の子

(須坂市) 丸山 葵子

選評

一句目、向日葵は太陽が移動する時にその方向へ顔を向ける。向日葵からしてみれば太陽が自分の周りを回ることとなる。これ即ち天動説かも。二句目、これは松本城の光景であろう。真夏の灼け

るような真昼となればその黒天守は本当に焦げているようだ。三句目、どの名山と限らず名瀑はその美しい姿と轟き落ちる水によってその山を削る定めにある。私は長野県では不動滝を思った。

今井 聖 選

短冊に孫を賣してと書いてみる

(松本市) 塩原 弥生

老犬の寝顔守るや立葵

(大田市) 丸山めぐみ

焼夷弾五ミリ外れて米寿なり

(立科町) 滝沢 尊子

縞蛇の骸にひとつ蠅光る

(佐久市) 町田ゆかり

団圓に戻らず夫の夕端居

(佐久市) 岩下サク江

胆振はる沙羅の落花を見届けて

(辰野町) 矢島あさ子

救急車より引き出す担架夏の暮

(岡谷市) 吉池富貴男

巢の縁を歩き子燕巢に戻る

(伊那市) 小切 三郎

ラジオ下げひねもす摘果終戦日

(飯綱町) 寺島 渉

翅一片神輿のやうに蟻の引く

(上田市) 竹内 創造

佳作

長持の底より遺稿十千

(箕輪町) 向山 政俊

叱られてひとり草笛吹いてをり

(安曇野市) 丸山 進也

選評

一句目、素直な吐露。童心と言ってもよい。表面的には季語がないが七夕という季語の本意はしっかりと存在する。二句目、立葵が老犬の番をしている。植物と動物の交流が作者の眼差しの中で描かれ

る。三句目、焼夷弾が身体から5ミリ逸れたために助かり今日米寿を迎えた。運命の不思議を思う。四句目、嫌われ者の死骸の上に嫌われ者が光っている。二者とも望んでそう生まれたわけではないのに。